資料2

第3回検討委員会における主な委員意見等

地域人材発掘・育成のアイデア等	地域活動に関すること	人材を発掘し、地域活動の継続につなげていくためには、毎週継続して実施できるようなものが良い。いつでも門戸を広げて、皆さん来てくださいよという形で。ラジオ体操だったらお金もかからない。
		入ってこられる門戸を常に開いておく。来たい人はどうぞ自由に。そうすれば、興味の湧いた人は長続きする。
		やはり定例的なものやハードルが低い活動が必要ということ、もう一つ、それに相重なって必要なのは、独自財源を生むような生産性のある活動になれば、人づくりは結構解決するのではないかと思う。あとは、魅力ある企画づくりとか、見える化とかという言葉が出てきているが、そういうことではないだろうか。
		地域で入りやすく、また、よくやられているなと感じるのが子どもたちを見守るパトロール。子供たちの笑顔が楽しくて活動しているという人が多く、どこの校区に行っても、シャツを着て、おじいちゃんと言ったらいけないが、楽しそうに見守りをやっている。まさに元気な高齢者だと思う。その元気な高齢者を地域の中に引っ張り込んで、楽しいものにしていくというのが一つのきっかけになるし、彼らの中から地域の幹部を養成していけると思う。
		人はいるが、他に楽しいことがあるわけだから、相当の意志を持っている人でないと入れない。ただ、中にはやりたい人もいるわけで、今やっていることを楽しくする発想がいるし、昔のように一度入ったら逃がさないという雰囲気ではいけない。気軽に参加していただくことが重要。
		校区で防犯パトロールを月に3回やっているが、私の町内からは、当番制ではなく、自発的に参加していただいている。自発的にそういうふうに集まっていただく、協力していただく人があるというのは、結果的にそういう事業について評価があるからだと思う。いろいろな形で企画して実施して、後でこの事業は良かったかどうか、住民の皆さんにもアンケートなどで意思を確認する。そのような仕組みの中で、自然的にそういう事業の世話をしてくれる人材が育っていくと思っている。
		定期的に実施して自由に参加できるというか、自分の意思で参加できる機会を多目につくるということと、興味のあることを比較的持っていただくということと、やはり重たくならないように「来たいときだけでもいい」という雰囲気づくりも必要だと思う。
		地域活動を義務的にやっているのではなく、何か楽しいことをやりながら、皆さんに返しているというところは出てきている。活動をやめて「新しい運動」をやっている。そのやめるという勇気はどこから出るのか、ちょっと私もわからないが、やっているところは結構ある。

地域人材発掘・育成のアイデア等	地域活動に関すること	私どもの校区では、ウオーキング、犬の散歩、いろいろな時間帯にされているので、そういう方たちを1年に1回集めて、決起集会をしている。100人ぐらいは集まっている。 　そこで腕章を渡し、とにかく散歩とかウオーキングとかされるとき、腕章だけしていてくださいと。それだけでもかなり抑止力になる。何かあったら公民館や110番に連絡してくださいということ。 その方たちに対する義務というのは、決起集会に出ることと、年度途中に1回、防災の講演会をご案内するだけ。あとは自由に自分の時間で見回ってくださいということでやっている。
		私が関わっている事業で朝キャンパスというのがあるが、青空の下で朝活動を行い、抑止力とか抑制力で犯罪をさせない雰囲気づくりとか、夜のまちのイメージを払拭させる、そういう意味がある。だから、一つ、直接的な犯罪を防ぐということも大事だが、そのまち自体が隙をつくらないように、地域活動をプランティングすることも大事だと思う。
	全般的なこと	今、ワールドカフェみたいなものが流行っているが、何か新しい会合で、最後まで片づけをしている人がいたら必ず離すなと昔から言われている。つまり、その人の適性を見極めるということが大事。
		青少年も20年経てばということで、道で会ったら必ず声をかける。挨拶だけじゃなくて、今度こんなことをするから来いと。そういう知っている人間には、人ごとに情報を聞き、渡していく。そういう広がりを持っていかないと、人は地域の情報なんてかぎ取ろうとしない。 何かイベントやワークショップがあるときに、前日に声をかけると2割は増える。あの人から声をかけられたら一歩踏み出すという場合もある。
		私はどこに行っても、初めて参加された方には、何町のどなたさんですかと必ず聞く。名前をメモしておき、次にその人に会ったときは、「〇〇さん、おはようございます」と言う癖が何十年とついている。そうすると、「ああ、名前を覚えてくださっていた」と思っていただける。
		会長が何でも独断でやるようになると、なかなか人が集まらず、育成も難しいと感じている。地域にはすばらしい人がたくさんいるから、いろいろな団体が集まって実行委員会をつくり、新しい人に実行委員長をしていただく、それだけで裾野が増えてくる。
		やはり、地域に関わっていることを誇りに思わせないといけない。つまり、関わらないことが格好悪いとか残念だというような雰囲気づくりができれば良い。いわゆるシビックプライドというような、地域を誇りに思わせるような考え方。
		インセンティブの話についてだが、例えば地域通貨としてスーパーに協力してもらって、3％でも2％でも出してもらえれば、それは活動に参加したことの意義とか、地域におけるそのスーパーの意義というのが出てくるのではないだろうか。
		町内会でも自治協議会でも、楽しく活動を広げているところは、次の担い手たちがいつの間にか見つかって、あんまり心配していないというところがある。1割にも満たないが。
		地域を背負っていない人たちが出てこなければいけない。地域活動は大変というイメージを持たない人たち。

地域人材発掘・育成のアイデア等	全般的なこと	地域事例で新人の研修の話があったが、まさに一番足りなかったのはそこだと思う。一般の校区の住民は、青少協とか市Pとか専門用語を言われても理解できない。
		対話をしながら、何か井戸端会議ができれば、次が出てくる。先ほどの「腕章して犬の散歩」という話も、人々が集まったら対話がありますし、やる気が起こるのだろう。一緒になると何かやれるというのはキーワードかなと思った。
地域での問題点等		問題点は結構どこも一緒。後継者不足、それから地域に対して無関心ということ。
		ある校区で、地域活動がなくなったらどうなるか分かりますかという質問をしたが、意外と皆さん困られた。地域活動やコミュニティが重要ということを無関心層に伝えていくことは重要だが、伝えていく方、活動している方々がその意義などをミッションとして共有する必要があるだろう。
		私の経験からして、自分の意思で、自分一人で参加申し込みしたり、参加したりできる人は少ない。そこで誰かが声をかけてやって、来てみたら、終わって帰るときには「今日来てよかった」という声が8割。あとは、その人が2回、3回と出てくるような周りのケアが必要。
		地域というのは住む場所なので、しがらみもあるし、初めての活動にはある程度覚悟が要る。自由に抜けたり入ったりすることができないと思っている。
		地域の一番の問題は、今、やっている活動をやめられないこと。新しい事業ばかり入ってくるが、やめることにものすごく苦労する。それは、先ほど言われたように評価がないから。
		地域はボランティアではないのかもしれない。奉仕でやっている人たちが多すぎる。自分たちが面白くないのを無理やりやっているという状態が続く限りどうしようもない。
		役員になれば、後継者を育てるまでやめられない結果、長く続ける人が多い。そして高齢者になっていく。団塊の世代の人たちに働きかけているが，なかなかうまくいかない。まだ仕事があるからと。
		「地域活動がなくなったらどうなるか」という話し合いの場を設けるという意見があったが、話し合いの場には地域に関わっている人しか参加しないので、関わっていない人は何も議論する場がない。
その他		昔よりも、行政の方も地域を必要に感じていると思う。地域の力を借りなければできないことがたくさんある。そういうことにはインセンティブやちょっとした手当なども必要ではないか。地域で頑張ろうという気持ちになってくると思う。
		この世界の専門家はいないということ。きっと皆さん、活動者一人一人が専門家なのだと思う。みんなで意見交換すれば、8割は解決しますよと私はいつも言っている。

地域のまち・絆づくり検討委員会（第1回～第3回）における意見等のとりまとめ

資料3

地域の課題

地域活動の担い手不足

（主な意見等）
・問題点はどこも一緒。後継者不足，それから地域に対して無関心ということ。
・役員になれば，後継者を育てるまでやめられない結果，長く続ける人が多い。
・これからは人材育成ということが重要ではないかと思う。

地域の負担感

（主な意見等）
・地域の負担が増え，役員の担い手がないという大きな課題を抱えており，後任のためにも十分検討すべき。
・校区の会長としての業務については，行政とのやり取りは2倍，3倍にも増えている。昔みたいな名誉職ではなく，かなりの激務である。

超高齢社会の到来

（主な意見等）
・高齢社会については，「超」がつく超高齢社会が目の前に迫ってきており，あまり時間的な余裕がないということもある。議論し進めるべきことは進めていかなければならない。

その他

（主な意見等）
・市の補助金からは今のところ報酬は出せない。報酬が出せるのは町内会の会費からが主になってくると思うが，そこは自助努力だと言われたら，報酬を出したいが出せない町内も出てくるのではないかと思う。
・行政に助けていただきたい部分もあるが，やはり自分たちで地域を開拓していかないと効果は長続きしないと感じている。
・企業の役割がとても重要だと思う。若い人たちが地域活動をしようと思っても，やはり仕事の関係で早く帰れないとか，どうしても仕事中心に考えるが，地域活動も企業活動の一つというふうに捉えて，ある程度それを容認できるような環境づくりをすることが企業にも必要になってくる。

対応の方向性

地域人材の発掘・育成

（主な意見等）
・新しい担い手の掘り起しを意識した取り組みが必要。
・ボランティア活動でも，文化祭や体育祭のような楽しい雰囲気ができればエネルギーを注いでいただけるのではないか。
・地域事例で新人の研修の話があったが，まさに一番足りなかったのはそこだと思う。
・一度入ったら逃がさないという雰囲気ではいけない。
・活動が活発な地域を参考にしながら，自らの地域の課題を見て，追いかけて取り組んでいく一方，行政も支援というのが望ましい。

地域の負担軽減

（主な意見等）
・行政からの依頼事項の問題だが，どの程度まで整理が出来たのか。
・行政の方も地域の力を借りなければ出来ないこと，そういうことにはインセンティブや手当てなども必要ではないか。
・どうすれば報酬が出せるのか，またどこから出せるのか，そのようなことも検討していくべき。
・限られた一部の方々，非常にアクティブな方々に最大限活躍していただけるよう，活動しやすい効率的な組織に再編，または機能を見直す必要があるのではないか。

超高齢社会に対応する地域コミュニティの形成

（主な意見等）
・福祉は，現場から見るとまだまだ行政がやるべきという雰囲気が強く，地域の6，7割は自分たちがやるべきことではないと思っているのではないか。
・見守りや支え合い，絆づくりという視点を考えると，市レベルではやっていけない。区レベルでも難しく，校区，そして町内会レベルで考える必要がある。
・行政の役割として，高齢者情報や場の提供を行うとともに，単に投げかけるのではなく，一緒になって取り組んでいくことが大切であると感じている。

求められる取組等（主体）

- ○地域主体による人材の発掘・育成の継続的な取り組み（地域）
- ○活動者を増やす・活動を楽しくする工夫（地域）
- ○「ゆるいコミュニティ」を含めた地域住民の交流の機会や場の増加（地域・行政）
- ○他地域の先進事例の共有（行政）
- ○報酬，ポイントなどによるインセンティブ（地域・行政）
- ○行政からの依頼事項のさらなる見直し（行政）
- ○自治組織の効率化・活動内容の見直し等（地域・行政）
- ○地域住民に対する「超高齢社会」についての理解促進（行政）
- ○地域主体の「地域の絆づくり」の推進（地域）
- ○地域主体の「地域の絆づくり」への必要な支援（行政）
- ○地域における課題は住民自らの課題として捉え，地域住民が協力して解決に向け積極的に取り組んでいく仕組みづくり（地域・行政）
- ○企業に対する地域活動への理解についての働きかけ（行政）

具体的なアイデア・意見

- ・校区主体でワールドカフェなどを検討してもいいのかなと思った。
- ・初めて参加された方には，必ず名前を聞く。次にその人にあったときには「○○さん，おはようございます」と。
- ・どうすれば魅力ある楽しい活動になるかというと、やはり企画に参加すること。
- ・毎週継続して実施できるようなものが良い。いつでも門戸を広げて、皆さん来てくださいよという形で。「来たいときだけでもいい」という雰囲気づくりも必要。
- ・ウオーキング、犬の散歩、いろいろな時間帯にされているので、そういう方々を年に1回集めて決起集会をしている。100人ぐらいは集まっている。そこで腕章を渡し、とにかく散歩とかウオーキングとかされるとき、腕章だけしていてくださいと。その方たちの義務は決起集会に出ることと、年度途中に1回、防災の講演会をご案内するだけ。あとは自由に自分の時間で見回っていただく。
- ・たとえば地域通貨としてスーパーに協力してもらって，3%でも2%でも出してもらえれば，それは活動に参加したことの意義とか，地域におけるそのスーパーの意義とかが出てくるのではないか。
- ・高齢者が介護ボランティアを行えばポイントを付与するサービスを福岡市も始めているので，そういった制度をもう少し広範に活用できないか。
- ・何か事業がある場合，会長でなくても対応できるものについては，副会長や他の役員で分担する形で負担解消を図れないか。
- ・自治協議会を中心に，地域として活動するものは全部その中の一つとして話ができれば，公民館を活かすこともできるし，地域全体が一体感をもって取り組んでいくことができると思う。
- ・これからの超高齢社会に地域はどのように臨んでいくかということについては，もう少しマスコミやメディアの力を借りた情報発信が出来ればより望ましい。
- ・これからは元気な高齢者が地域を活性化する大きな力になっていくと思う。たとえば，元気な高齢者がそうでない高齢者を見守るなど，地域にとっては非常に重要である。

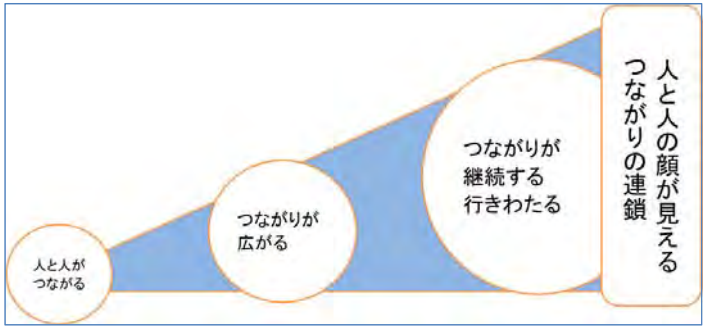
地域主体の「地域の絆づくり」はどうすれば進められるのだろうか・・・

資料４

地域の絆づくりについて

１　地域の絆づくりのイメージ

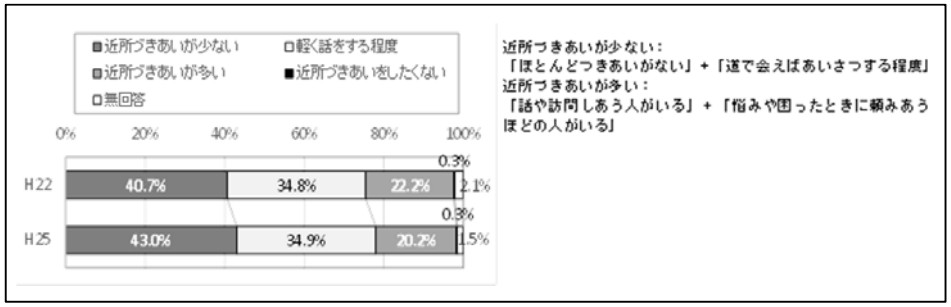
住民同士が「普段からの顔の見える関係」をつくり，交流を深め，人間関係を構築していくことで育まれる「人と人の絆」が地域全体に広がっていくことを想定している。



２　地域における課題と絆づくりの必要性

近年，社会状況としての都市化の進展，人々の価値観やライフスタイルの多様化などにより，コミュニティ意識の希薄化が全国的にも課題とされ，「自治会・町内会への未加入」にもつながっているが，その根底には**近隣住民同士の関係の希薄化**があり，第３回検討委員会で議論いただいた「地域住民が主体的に取り組むまちづくりの実現」に向けた「ひとづくり」と併せて「地域の絆づくり」を進めていく必要があると考える。

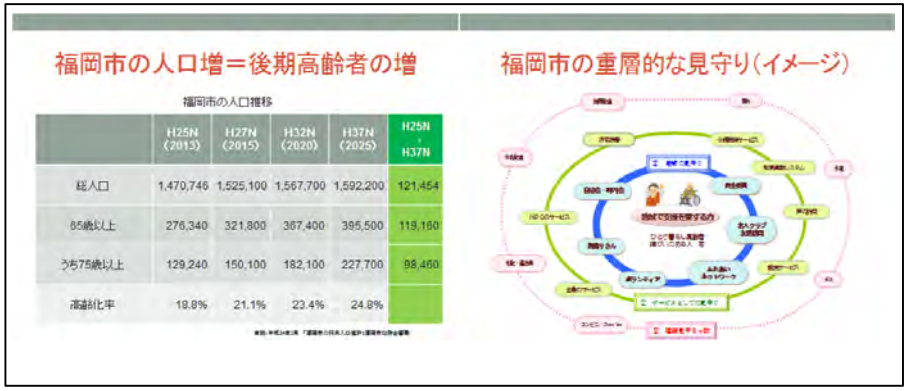
＜参考資料＞「福岡市高齢者実態調査（Ｈ22，Ｈ25）」



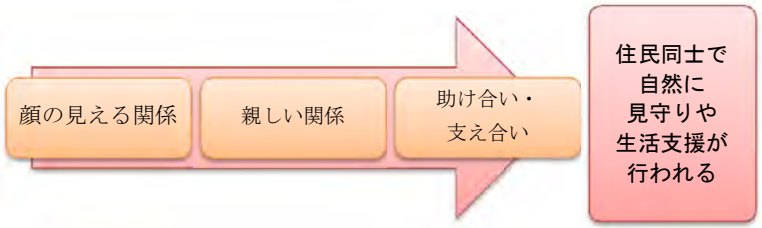
３　超高齢社会を見据えた絆づくり

第２回検討委員会「超高齢社会に向けた対応」において議論したとおり，今後，本市においても急速に高齢者が増えていく中で，行政の支援にも限界があり，今後は地域における「助け合い」「支え合い」などの共助の力が重要になってくる。

＜第２回検討委員会資料より抜粋＞



本検討委員会で，「超高齢社会に向けた対応」として地域における高齢者等の見守りなどについて意見をいただいているが，地域における住民同士の「顔の見える関係」→「地域の絆」を育んでいくことで，住民に「助け合い」「支え合い」などの意識が生まれ，自然に「見守り」などの活動につながっていくことが期待できる。

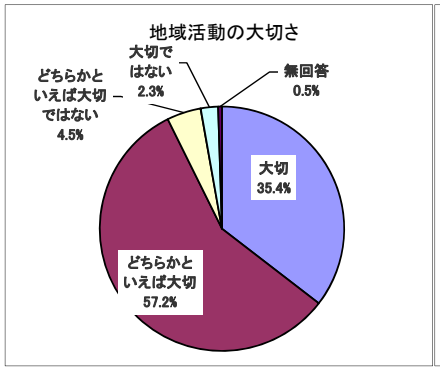


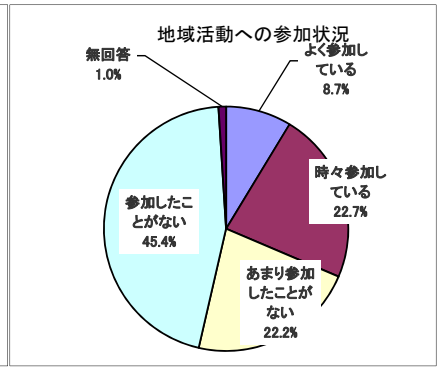
４　地域の担い手づくりとしての絆づくり

一方，現在，地域活動への参加という切り口でみた場合に，「地域活動に参加している」「地域活動に参加したいができない」「地域活動に興味はなく参加しない」という形で層が固定化している傾向にある。

市政アンケート調査結果でも，ほとんどの人が「地域活動は大切」と感じているが，実際の活動にはつながっていない状況となっている。

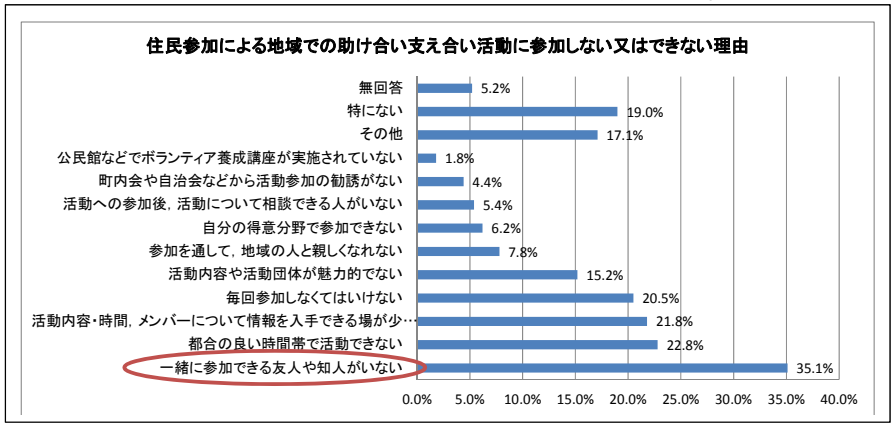
＜参考資料＞Ｈ２６市政アンケート調査結果





今後，地域活動を活性化するには，地域全体のつながりを広げていく必要があり，既存の地域活動への参加に消極的な層の中の絆づくりや，活動をしている方々との絆づくりも必要となってくる。

＜参考資料＞福岡市保健福祉総合計画策定等にかかる市民意識調査結果



５　地域における活動事例

別紙のとおり

６　今回議論すること

「地域の絆づくり」について

<u>◎意見を深めていただきたいポイント（地域，行政，個人の視点で）</u>

・地域の絆づくりに必要なこと
・絆づくりを進めるためにできること
・地域における活動事例などを参考に，地域の絆を具体的な活動につなげていくために大事なこと

地域における活動事例

校区単位での地域活動事例１：三苫校区営繕おたすけ隊

１　活動のきっかけ・経緯

三苫校区は平成 26 年９月末現在の高齢化率は 15.5%と，それほど高くなく，若い世代の転入も多い校区であるが，高齢化率は着実に増加傾向にある。ふれあいネットワークの見守り活動を通じ，単身・夫婦のみの高齢者の増加，生活支援の必要性を実感。また，民生委員の負担増もあり，「助けて」と言える関係づくりを目指して，校区内の有志が集まり「三苫営繕お助け隊」を平成 25 年７月に結成。

２　活動の内容

水道の水漏れや電球の取り替え，話し相手など
活動実績：月 3～5 件（平均）
活動人員：18 人（校区内の有志：男 13，女５）
料金：無料（材料費の実費は依頼者負担）
対象者：高齢者，障がい者

お助け隊の活動の中で見守りが必要な人がいれば民生委員やふれあいネットワークに繋いでいる。

活動者には自治協，民生委員，校区社協，老人クラブ等校区の主なメンバーが入っており，年 2～3 回定例会を開催し情報共有を行っている。

３　今後の取組の方向性・課題など

・ふれあいネットワーク活動との連携でお互いの活動を活性化させていく。
・校区内におたすけ隊の活動をさらに広報し，「助けて」が言える校区にする。

校区単位での地域活動事例２：城南区堤校区「つつみカフェ」

１　活動の経緯

堤校区においては、平成２１年度から認知症サポーター養成講座や認知症窓口紹介、劇団つつみなどによる認知症啓発活動を行う中、認知症サポーター講座などを受けた方々が、ステップアップ講座を修了された後、「自分たちで何かしたい。何かできないか。」という思いから、気軽に立ち寄って、お茶やコーヒーなどを飲みながらおしゃべりを楽しんだり、認知症の人やその家族、介護をしている人や子育て中の人などが、互いの悩み事などを相談する場所として平成２５年５月に「つつみカフェ」を開設。

２　実施状況

毎月１回 10 時～16 時で開催
２５名のボランティアで運営
※ボランティアはあらかじめシフト体制などを組んでおらず、参加できる人が自由に参加している。
毎回 80～100 人程度の参加者
遠方の参加者を考慮して地域集会所等でも開催
相談コーナーを設置し、いきいきセンター職員や保健師などが対応

３　今後の課題等

・参加人数が増えてくると経費面での負担が増えてくる。
・家から公民館まで遠くて来られない方をどうするかが課題。

自治会・町内会単位での地域活動事例：

【Ａ町内会での事例】

町内での孤立死の発生等を地域の課題としてとらえ，町内清掃・共益費徴収時の声かけ・安否確認，町内定例会での見守りに関する情報共有，役員の後任者への見守り活動の内容を見える化した資料の引き継ぎなどに取り組んでいる。

【Ｂ町内会での事例】

町内の単身高齢者の増加を課題ととらえ，ごみ捨て支援を開始。ごみ袋を見守り対象者が玄関前に出しておき，それをボランティアがごみ置き場まで持ち出す。ごみを出していない場合はノックし，ごみの有無を確認することで見守り活動もあわせて行っている。